新入生歓迎セミナー

学生部主催の新入生歓迎セミナーは、入学前に充実した学生生活のヒントを見つけてもらおうと企画されたものだ。今年は3月24日から26日まで、専修大学箱根セミナーハウスで41人の新入生と8人の学生スタッフ、8人の教職員が参加して行われた。

さまざまな活動で高い目標に挑戦している先輩からのアドバイスや、楽しんで議論しながらコミュニケーションがとれるグループワーク。富士急ハイランドでのフィールドワークとプレゼンテーションなどのアクティビティーを通じて参加者が得たものとは…。新入生と先輩として参加した学生スタッフの感想を紹介しよう。

▲　箱根セミナーハウス前で「センディ」ポーズ

充実した学生生活のきっかけに
先輩や教職員との触れ合いの中で

▲　工夫を凝らしたプレゼンテーション

自分を変えるチャンスつかんだ3日間

藤田　麻希さん（文1）

セミナーのチラシを手にした時、すぐに行きたい！と思い、両親に相談しました。

どこに行くか、何をするかなどまったく目に入らず「とにかく友達をつくり安心したい」という思いがありました。

今振り返ると、そんな単純な理由でもすぐに行動できたことで、チャンスをつかめたのだと思っています。大げさに聞こえるかもしれませんが、この3日間を通して、自分を変えることができました。

班のプレゼンテーション。以前の私なら、冷めていてめんどうなことはある程度までやり、無事に終われればいい…くらいにしか考えられませんでしたが、今回はまったく違っていました。初対面の新入生5人と支えてくださる先輩。こんなにも仲が良くなれるとは本当に思っていませんでした。他の班が準備を終わらせていく中、最後まで残り仕上げた模造紙。タイトル一つでも長時間話し合い、伝える内容を考え、夜遅くに集まり何度も行った発表練習。終わったあとの充実感は時間が経った今も忘れられません。何枚も写真を撮って、「頑張ったね！」「ホントにお疲れ！」「この班で良かった！」…冷めていた私がこの班で良かった！　なんて普通なら言わないんです。何よりも自分が驚いています。

こんな気持ちになれて、素晴らしい仲間に出会えたのは、企画してくださった先生方・先輩方のおかげです。

入学前でも、こんなにも専修大学を身近に感じ、好きになれています。自分を変えるチャンス。このセミナーは確実に私のチャンスだったと思います。

誇り持って学業に取り組む――誓い新たに

宮川　馨さん（法1）

浪人しており、地方出身ということで、コンプレックスを感じていました。「参加可能」とメールをもらったときも、「きっと参加しても誰ともしゃべる必要はないだろう」と思っていました。しかしセミナーが始まり、コンセンサスのグループワークの時、メンバーたちの、人の意見を積極的に聴き入れようとする姿勢を見て、このような姿勢をとることができる人たちと一緒に勉強できることに感動しました。

プレゼンでは班のメンバーが頑張ってくれたにもかかわらず、焦って読むべきものを読まず、書くべきところを書かずと失敗ばかりで優勝を逃してしまい、悔しい思いもしました。しかし、こんなにも真剣に一つのことに取り組ませてくれる環境があることに感動したのも確かです。多くの先輩や先生方、職員の皆さんのお陰で充実した3日間を送れました。

「誇りを持って専修大学の学生として学業に取り組む」と言った発言にうそをつかないよう、自分の目標に向かって、一歩ずつ歩んでいきたいと思っています。

学生スタッフとして参加――新入生から学ぶ

大津　智世さん（経営3）
専大スポーツ編集部編集長

セミナーで出会った仲間たちと、共に過ごした時間は本当にかけがえのないものとなりました。前日までは新入生とどのように接したらいいのか、緊張と不安でいっぱいでしたが、いざ始まってみると今までの不安がうそのように、上級生、新入生という枠にとらわれずに中身の濃い充実した時間を共有することができました。

学生スタッフとして参加しましたが、私から新入生に何かを発信したというよりも、新入生から学んだことのほうがはるかに多かったと思います。また、志の高い他の学生スタッフのメンバーからも、今まで培ってきた価値観や人生観をがらりと変えてくれるほどの刺激を受けました。

解散するときに新入生たちが「本当に参加して良かったです」と口をそろえて言っているのが印象的でした。それを聞いてうれしかったですし、私自身も参加して良かったと心の底から思えました。

出身も、年齢も、今まで育ってきた環境だって違う。そんなメンバーたちとグループワークやプレゼンテーションなどの作業を通して〝仲間〟という意識が芽生え、自由時間には将来の夢や大学生活での不安、趣味の話から高校時代の話まで、いろいろな話を多くの参加者たちと語り合いました。

さまざまな思いを持って専大に入学した新入生と学生スタッフ。目標やそれに対する意識を高め合える仲間に出会えたことをうれしく思います。

人とのかかわりの大切さに気づく――この感動忘れない

江口　航さん（法1）

「数人の気の合う仲間を見つけられればいい」くらいの軽い気持ちで参加を決めました。しかし感想を考えているいま、時間が戻ればいいと感じるくらい、セミナーは充実していました。

進学する際、心に決めたのは、「自分自身をしっかり持つ！　夢に向かっていく覚悟を持って学ぼうとしている仲間を見つける！　学習は当然しっかりやる。そのかわり、楽しむ時は精いっぱいに笑って楽しめる仲間を見つける！」この3つでした。そして参加して、それはすべてクリアしていると感じています。

プレゼンの時などの参加者の真剣で、まっすぐな顔を鮮明に覚えています。1日のスケジュールを終え、寝ることさえ忘れて語り尽くしたこと。初対面という壁を飛び越え、いつでも笑っていられた仲間たちに出会えたこと。メンバーとは、わずか2泊3日しか一緒に過ごしていませんが、一人ひとりが本当に温かくて楽しくて、ずっと一緒にいたいと感じ、4年間、同じ大学で過ごせる仲間や、気軽に相談できる先輩や先生方と出会えたことを幸せに思いました。

きっとセミナーでみんなに出会えたのは運命的なものだし、自分にとって間違いなくプラスになりました。些細なことでも笑い合える、一緒に何かを成し遂げられる仲間の大切さに改めて気付かされました。これからの学習に役立つものでもあったし、人と人のかかわりの大切さにも気づけた、素晴らしい授業のようなものにも思えました。

できるならば、この感動をやがてできる後輩にも伝えていきたいです。そして自分自身が、これから始まる専修大学での生活、専修に行ける喜びと楽しみ、誇りと不安、さまざまな思いを抱えながらも、最後に笑って旅立つことができる生活をしたいです。その第一歩として共に過ごした新入生、先輩方、先生方に心からの感謝の気持ちを伝えます。

▲　感動の閉会式（サテライトキャンパスで）

専大とともに　神田神保町探索　〈〈9

▶　左から竹内康悦さん、まさ子さん、祐美さん

こだわりと伝統　小さな「大」菓子

大丸やき茶房

古書店が建ち並ぶ靖国通りから路地に入ると、柔らかな甘い香りがあたりを包んでいた。「大丸やき茶房」の看板菓子「大丸やき」は、店頭で焼き上げられる。1時間に70個。販売数は1日平均400個。たくさんのファンを持つ逸品だ。

しっとりしたカステラ生地と上質な小豆・砂糖だけで煉った濃厚な餡（あん）、そのふたつが口の中で絡み合う。焼き立ても冷めてもいい。数日経つと素材がなじみ、より味わい深くなる。

「私のやっていることは、足し算でも引き算でもない。代々受け継がれたものを、そのまま守っているだけ。それが文化と思っています」と言い切る現店主の竹内康悦さん。頑固一徹な先代・章さん（故人）の背中を見て育った。

効率性や大量生産に背を向け、「本物の味」を貫く。北海道産の大豆など選び抜いた素材で、全工程自家製を守る。防腐剤も一切なし。餡作りは、明治時代の手法そのままだ。風味が損なわれないよう、焼き立て一つひとつがスキンパックに施されている。「大」の字が彫られた小さな菓子に、こだわりと伝統がぎっしり詰まっている。

京都「大丸」茶業部の出店として神保町・靖国通りに、康悦さんの父・章さんが「大丸茶舗」を構えたのが1948年。章さんの父が和菓子職人だったこともあって、店内で落ち着いてお茶を飲み、甘いものも楽しんでもらいたいと「大丸やき」を考案した。店の名も「大丸やき茶房」とし、85年、靖国通りと平行に走るさくら通りに店舗を移転した。

メニューはほかに「最中」、「あんみつ」「ぜんざい」「田舎汁粉」など餡を使った甘いものが並ぶ。丁寧にいれられた玉露や煎茶（せんちゃ）でいただく。夏はかき氷も。どれも素朴で昔ながらの味わいだ。

店内には、康悦さんの母まさ子さんと妻祐美さん。「専大の先生や職員の方もよくいらしてくださるんですよ」とまさ子さんはにこやかに語る。

近くに出版社が多い神保町かいわい。常盤新平、林真理子両氏ら作家も店のファン。客層は意外なことに「男性客が多い」と康悦さん。

＊**大丸やき茶房**＝東京都千代田区神田神保町2の9☎03（3265）0740

▶　神保町のさくら通りにある店舗